2026年10月18日（日）第575回・ボイスキュー「グラウンドワーク三島・アクショントーク」

水の苑緑地の保全とネパール交流の実践知

テレビ放映後に急増した来訪者対応と水の苑緑地の維持管理の課題、そして、市民参加の「水辺のサポーター」会員募集を具体策とともに共有。

加えて、11年継続のネパール青少年の受入を通じた、体験型環境教育の効果と国際的な交流を、具体的な事例と数値で明瞭に示した。

水の苑緑地における放映後の反響と維持管理の実相

番組は、8月21日の収録内容が、9月24日に、テレビ朝日で放映されたことを起点に、現場の状況変化を詳細に報告した。

放映効果は、著しく顕著で、周辺店舗の売上は5倍から10倍に跳ね上がり、特に、雅心苑のアイスキャンディーは、在庫が約50本から200本超へと拡充されるほど需要増を記録した。

一方で、放映で紹介しきれなかった裏側（例：ゆめみしまのおむすび試食シーンはオンエア未採用）も共有され、メディア露出と現場実務のギャップが示された。

維持管理では、苔・芝生整備に高額な資金を投入。乾燥や落葉で枯死・劣化を防ぐために日々の落ち葉掃き、水撒きを継続している。

白い砂利を池底に引きつめて、池の美観は向上したが、上流側のもう一つの水源に、ヘドロが残存しており、約500万円以上の費用が必要な浚渫が未着手のために、汚水流入と風塵・落葉による堆積で、池床の汚れが再発。

来訪者から「管理努力不足」との叱責も受けつつ、現実的な財源・作業限界の中での是正策模索が続く。

技術的対応としては、リース会社と連携し、バキュームをレンタル導入。

月額3万円のところ1万円での試行にこぎつけ、池床堆積物の吸引除去の実証実験に着手予定。

また、繁茂する竹への対処も継続中で、2ヶ月で400本以上を伐採。放置すれば1〜2mへ短期伸長するため、成長サイクルを見越した連日対応が不可欠になっている。

これらの作業は、放映後の来訪増に伴う景観維持の要求水準の上昇と相まって、現場チームの持続的負荷として積み上がっている。

市民参加の「水辺のサポーター」募集と養成講座の開講

水の苑緑地の美観と生態保全のため、市民ボランティア「水辺のサポーター」会員を募集中。

現在約 50 名が登録済みで、活動は一時間弱の軽作業。

基本は木曜日の午前 9 時半集合だが、参加者の「良き日」（土日含む）を尊重し、随時メール通知で柔軟対応を呼びかける方式を採る。

会費は不要で、用具等は NPO 側で準備するため、初参加でも敷居が低い。

合わせて、源兵衛川の歴史・デザイン・生態を体系的に学ぶ、全 8 回の「水辺のサポーター養成講座」を開講。

500 年前に築かれた農業用水路である源兵衛川の成り立ち、心地よさの源泉としての環境デザインの工夫、トンボ・鳥・魚に代表される生態的価値などについて、専門家の解説を含めて、座学と現場での体験・理解を深める。

全回参加が必須ではなく、関心の講座のみの参加でも構わず、詳細・申込は、グラウンドワーク三島の公式ウェブサイトで案内している。

市民が、自分の生活リズムに合わせて、環境再生活動に持続的に関与できる仕組みを中核として、現場管理と学習の往還が設定されている。

ネパール青少年交流事業：受入計画と体験設計

ネパール日本友好協会（山梨）主催の招待事業は、今年で第 17 回目。

グラウンドワーク三島は、三島滞在の 2 日間を 11 年連続で担当。

今回は、中学生 4 名に教員 2 名を加えた 6 名を受入れ、ホームステイを行い、水環境の再生活動と日本の生活文化を体感するプログラムを行う。

行程は、海の訪問（時期により見学・遊泳、今回はイルカと触れ合う）、箱根での遊覧船・三島スカイウォーク体験、三島での川歩き・魚捕り・バイカモ保全・清掃活動・松毛川での植林など、観光と実践活動を織り交ぜる。

ネパールの首都カトマンズは盆地地形で、周辺からのし尿浸透や排水流入により、水質が悪化している現状を踏まえ、三島の清流・生活ルールを「体験」で伝える。

お風呂の使い方や車内ゴミの扱いなどの違いは、悪意ではなく、環境・教育の違いに起因するため、ルールと道徳の関係を現場で学ぶことが狙いである。

最終セッションでは「環境とは何か」に関する、私からのプレゼンを実施し、学びの機会と行動・体験の重要性、意義、意味を伝える。

実践清掃がもたらす意識改革と国際波及

現場でのゴミ拾いがもたらす「言葉なき影響力」と価値観転換の具体事例が重層的に語られた。

ネパールには、13 階層のカースト制が存在し、清掃は、最下層が担うとされ、上位層が手を出さない文化的な慣行がある。

そうした背景のもと、三島でのゴミ拾い体験が、トリプバン大学の学生に火をつけ、帰国後に自発的清掃運動を開始した成功事例がある。

かつて、政府転覆のゲリラ活動で政権転換を実現した、英雄・コイララ氏（元大学教授・元首相）も関与し、活動は 10 年以上継続している。

象徴的な逸話として、富士山の駐車場での「荒療治」エピソードが紹介された。

富裕層の参加者が「なぜ自分がゴミ拾いを」と反発したが、実地作業を通して認識が反転し、日没が迫る中でも「もっとやらせてほしい」と自発的にゴミ拾いを継続した。

のちに彼女は、ミス・ユニバース・ネパール代表となり、世界大会で 3 位に入賞。

そのスピーチで三島での清掃体験と価値観の転換を語り、高い評価を得た。

こうした事例は、文化・身分差を越えて「汚れを拾い清める行為」の満足感と倫理性が普遍的であることを示しており、現場での模範行動が、連鎖を生む、教育的な波及効果を可視化・実証している。

また、街中で落ちたマスク等を前方の大人が拾わなかった場面、先頭が拾う姿勢を見せることで、後続の若者が、躊躇なく拾い始める「先導の力と勇気」も検証的に語られた。

ゴミ拾いは単なる労働ではなく、勇気と倫理の訓練・修練であり、行動を通じて「捨てない社会」を育てる、道徳的行為である。

三島でのローカルな実地体験・刺激が、ネパールの社会運動や若手リーダーの台頭に結びつくまでの因果が、具体的な数字・人名・制度的な文脈とともに、丁寧に語られた。